

三峯神社の境内変遷に関する研究

建設工学専攻
建築史研究

ME17033 木村 優花
指導教員 伊藤 洋子

1. はじめに

三峯神社は埼玉県秩父市にある神社で、秩父神社、寶登山（ほどさん）神社に並ぶ「秩父三社」のうちの一社である。三峯神社の歴史は長く、創建は今から1900年前と伝えられおり、江戸時代には京都聖護院の直末にもなった仏教色の濃い神社であることから、明治期に神仏分離の影響を受け、境内は歴史とともに変遷があったことは明確である。しかし、三峯神社の境内変遷に関する研究は少なく、社殿に関する研究もあまりされていないため、境内社殿の歴史や変遷については未だ明らかではない。

本研究では、現存している社殿、絵図等から、境内及び社殿の変遷をたどると同時に、埼玉県内並びに三峯神社と近い環境にあった全国の神社の境内と比較を行うことで、これまでの境内変遷の中でも特に明治期に神仏分離の影響をどれほど受けたのかを明らかにすることを目的とする。

2. 三峯神社について

2.1 三峯神社の概要

三峯神社は『三峯山大縁起』によると、約1900年前に日本武尊が東征で雲取山・白岩山・妙法ヶ岳の三山を訪れ、伊弉諾尊・伊弉册尊の国造りを偲び、景行天皇によって三峯宮が創建されたことが始まりとされている。

鎌倉時代には三峯山の信仰も広まり、東国武士の崇敬を集めるが、正平7年（1352）足利討伐に敗れた新田氏らが三峯山に身を潜めたことで、足利氏の怒りを買って、社領を奪われ急激に衰退する。それから約150年後の文亀2年（1502）三峯山の荒廃を嘆いた月観道満が約27年の歳月をかけ全国を行脚し、復興資金を募り、社殿・堂宇を再建した。

江戸時代には徳川将軍家と紀州家、関東郡代伊奈家から篤い崇敬を受け、十万石の格式まで繁栄した。また寛文5年（1665）には越生の修験山本坊の配下を離れ、本山聖護院の直末となり、本社を三峯山大権現、別当寺院を三峯山観音院高雲寺平等坊とした。しかし、宝永7年（1710）に一如法印が亡くなったことで無住の状態に陥り、約10年間境内が荒れてしまう。その後、享保5年（1720）頃に日光法印によって社殿と堂宇が修復され、三峯山は再び隆盛を極めた。明治2年（1869）になると、神仏分離令によって別当寺院が廃寺となり、それに伴い仏教堂宇は用途を変更され、現在の三峯神社に至る。

2.2 三峯神社境内の建築物について

三峯神社境内の建物には、本殿・拝殿、隨身門、神楽殿、国常立神社・祖霊社をはじめとする24の撰末社、旧本堂である小教院、参拝者のための宿泊施設である興雲閣、秩父宮が宿泊の際に利用した秩父宮台臨記念館などがある。



写真1 三峯神社拝殿



写真2 秩父宮台臨記念館



写真3 国常立神社



写真4 隨身門



写真5 東照宮上舎



図1 三峯神社配置図

2.3 国常立神社について

明治の神仏分離令によって創建された撰末社の中の1つで、江戸時代までは護摩堂または本地堂と呼ばれていた。現在の社殿は、宝暦11年（1761）に護摩堂として再建されたものである。

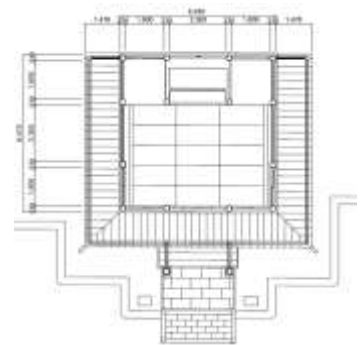


図2 国常立神社平面図

3. 境内変遷について

江戸後期の三峰山全図、明治5年（1872）御用留抜書、昭和12年（1937）八州講社奉納三峰灯籠完成記念碑建設ノ件許可、昭和61年の境内配置図を主として、絵図及び文書、写真等をもとに、江戸時代から現在までの境内変遷がどのようなものであったかを明らかにする。

3.1 明治期までの境内変遷について

三峯神社は神仏分離が起こるまで、京都聖護院の直末であったこともあり、境内には護摩堂や開山堂、行者堂など仏教の堂宇が複数あったことが江戸時代に描かれた絵図から分かる（図3）。また明治5年御用留抜書の絵図を見ると、仏教堂宇は見られないが「元護摩堂」や「元仁王門」の記載があることから、建物自体は壊されなかったと考えられる。そして『武州秩父三峰山案内』等の文書より、護摩堂は国常立神社、本堂は小教院、日本武尊社は行者堂、開山堂は祖霊社へと用途を変えて残されていることが分かる。ただし『県社三峯神社明細帳』より、開山堂は明治元年に壊れたため、現在の祖霊社の社殿は旧歎喜天堂のものが使われていることが分かっている。



図3 三峰山全図



図4 明治5年御用留抜書

3.2 明治以降の境内変遷について

明治になり神仏分離令が発令されると、仏教の堂宇は撰末社等へと用途変更されたが、大正時代になるまで建物配置に関して大きな変更は見られなかった。大正12年（1923）には社務所（現 齋館）が建設され、昭和6年（1931）には秩父宮台臨記念館が、昭和39年には報徳殿が新たに建設された。昭和59年になると、本殿の隣に社務所が新築され、国常立神社が現在の位置へと移築された。その際、旧社務所は齋館へと名称を変更された。また同年に、以前炊事場があった場所に、参拝者の宿泊施設である興雲閣が建てられている。



図5 八州講社奉納三峰灯籠完成記念碑建設ノ件許可



図6 昭和61年 境内配置図

4. 他の神社との比較

三峯神社と近い社格であり、同様に修験道が盛んであった長野県の戸隠神社、そして三峯神社と同じく京都聖護院の直末であった秩父の今宮神社を対象に、神仏分離の際に受けた影響の違いを比較する。

三峯神社は神仏分離の際、すみやかに分離が行われたが、前項からも分かるように堂宇等は残され、用途を変えて使われていたことが分かる。また、堂宇に祭られていた仏像は、宝蔵の奥深くに安置され、神職によって密かに祀られていた。

戸隠神社では、僧侶を中心に神仏分離が行われたこともあり、仏教色を取り除くために境内には手が加えられたが廃仏毀釈には発展しなかった。また、社殿の神仏分離と各衆徒家のそれとを別の次元として対処したこともあり、仏像仏具の大部分は関係者の家へと引き取られ、大きな仏像に関しては山を下り、縁故ある寺や信者に引き取られていった。

今宮神社は、神仏分離令により修験道が廃止されて以降、別当寺院である今宮坊は解体を余儀なくされ、今宮神社と今宮観音堂、橋立観音堂に分離され、独立して管理されるようになった。

以上のことから、三峯神社のように仏教関係の建物が排除されず、また仏像等をそのまま神社で保持保管し続けていることは珍しい事例であると考えられる。

5. まとめ

三峯神社は、江戸時代には京都聖護院の直末にもなり、境内には本堂、護摩堂、開山堂などが立ち並ぶ仏教色の強い神社であったが、明治に入り神仏分離令が発令されると、速やかに境内の別当寺院を廃し神社内の神道一本化を図った。しかし実際は、仏堂を撰末社等へ用途変更し、仏像や仏具は宝蔵の奥に仕舞われ、密かに祀られていくようになる。以上のことから三峯神社は、神仏分離の際に仏堂等を破壊せず、名称のみを変えて現在まで残してきたことが分かる。また三峯神社と近い状況にあった神社では、境内に仏堂や仏像が残されなかったことから、三峯神社の神仏分離は珍しい事例であると考えられる。

参考文献

- 1) 三峯神社HP <http://www.mitsuminejinja.or.jp/>
- 2) 『三峯神社史料集 第一巻』横山晴夫 1983
- 3) 『埼玉の神社 入間・北埼玉・秩父』埼玉県神社庁神社調査団 1986
- 4) 「武州三峯神社の神仏分離」朝日則安 山岳修験 24号 p65-p80 1999
- 5) 「戸隠の神仏分離について」越志徳門 全史料協関東部会会報 No.74 p4-p8 2010